

前近代の受胎調節をめぐる

新村 拓

いつの時代においても計画出産という概念はあった。計画出産は自分たちの生活を守るために、あるいは村の存続のためになされるものであり、それは第一に、人口を適正な規模に押し止めるための工夫、第二に、望まない季節における出産を回避するための工夫、第三に、優秀児を得るための工夫、において顕著にあらわれている。出産調整といえ、とかく墮胎・間引きの行為が前面に出がちであるが、実際にはそれに至る以前の段階において受胎調節や出産回避のためのさまざまな工夫（手段）が、古代以来、試みられていたのである。その工夫とはまず、性交にかかわる禁忌や禁欲にもとづく性交回避にはじまって、道教の養生法に由来する性交中断、避妊効果があるとされる長期の授乳行為、避妊薬あるいは墮胎薬（通経薬）の使用、性欲減退薬（不発薬）の服用、避妊具の使用などがあり、前近代社会においても計画出産を可能にさせる手立てが考えられていたのである。

ここで、受胎調節にもとづく計画出産という概念の存在を裏付けるために、統計的な処理が可能な幕末から現代に至る時期の月別出生率をとってみたところ、具体的な数値については省略するが、おおよそ次のような結果となった。すなわ

ち、近代およびそれ以前の社会では、出生の山は冬場にあり、夏場は低出産の傾向にあった。それが現代に入ると、夏にも出生の低い山が生まれ、やがて冬の山は消える。そして、総体として出生の季節的な変動は縮小することとなった。これは何を意味しているのかと言えは、かつては農閑期に出産を合わせるといふ農事暦を念頭においた受胎調節がなされていたのであり、現代のそれは無季節性の会社暦に変わったということである。いずれの時代においても出産の月を意図的に操作する受胎調節がなされていたと考えることができる。

（平成七年九月例会）

『鎮将府日誌』について

（その一・序説）

中西 淳朗

昨年の「横浜軍陣病院の再検討」に引きつづき、『東京大病院の日記』等を読むうちに、明治維新時の一時期に、鎮将府という機関が東京大病院とかかわっていることを知った。

最近、『鎮将府日誌』二十四巻と『明治官令医範』を入手したので、これらを中心に研究をすすめている。

『鎮将府日誌』は、十四×二十一センチ、一巻が美濃紙十五枚ほどで、二巻を一冊とした木版刷りの和綴本で、全二十四巻十二冊となっている。記事は慶応四年七月二十七日から十月八日までのことを記している。